



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学



FDニューズレター

2013年
3月発行
通巻 第12号

Hokkaido
Information
University

巻頭言

“天動説のお方”

経営情報学部 澤井 秀

昨年（2012年）は筆者ら団塊の世代の者たちが若き日に熱狂したビートルズのデビュー50周年、そしてローリング・ストーンズの結成50周年という節目の年でしたが、思えばこの50年の間に世の中はずいぶん変わったものです。「人生は変化であり、挑戦だ」と言って、自らの音楽のスタイルを次々と変化させた有名な黒人ジャズトランペッタのように自らをどんどん変えられる人はいいのでしょうが、多くの人にとっては世の中の変化を受け入れて自らを変化させていくということに対して抵抗する相当なイナーシャ（慣性）が働くようです。変化するということは、それまで持っていた価値観がある日突然崩壊してしまうということでもあります。そして、誰もが、そのような変化に戸惑い悩みながら、その都度新たな価値観を形成しようともがいてきたのだと思います。

ここで言う『価値観の崩壊』というのは、例えば、五輪出場を目指して鍛錬してきたレスリングの選手が、ある日突然、レスリングが五輪種目から外されて

しまつて、五輪出場ということ以外のことに新たな価値観を見出さないと人生の意味がなくなってしまうというようなことです。別の例を挙げれば、近頃、電力小売市場の自由化や発送電分離などの議論が盛んですが、それらの改革が実現されれば、程度の差こそあれ、電力会社の社員には同じような価値観の崩壊という事態が襲いかかります。そのようなことはこれまでも何度も起きています。JR（旧国鉄）やNTT（旧電電公社）然り、郵政改革なども然りでしょう。そして、それほどの巨大な変化ではないにしても、多くの企業を始めとして、中央省庁や大学・研究機関などにも改革の波は押し寄せて、否が応にも重い腰を上げなければならぬことになりました。

筆者が長年在籍した民間企業の場合には、スピード感を持って変化していかなければ生き残れませんから、情け容赦なくどんどん変わっていきます。それは改善などという小手先だけの変化ではなく、社員たちが自らの価値観を変えていかなければ適応できないほどの変化、すなわち変革の連続です。大学においてもそのような変化の要求が突き付けられて、具体的にどう変わっていったらいいのかということを考え試行する有力な手段の一つがFDなのだろうと、筆者

目次

1. 巻頭言…………… 1
2. 「主体的な学び」プロジェクトがスタートしました… 3
3. 入学前教育の実施について 6
4. EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCE 参加報告…………… 8
5. FDフォーラム開催報告… 12
6. ピアレビュー制度の導入 支援の成果と今後の課題… 14
7. 「学生による授業評価 アンケート」の状況報告… 16
8. 大学間連携SD研修会 参加報告…………… 17
9. 学生FD活動 ―今年度のゼミ説明会について― …… 18
10. FD関連行事および活動実績 20
11. 編集後記…………… 20

発行：北海道情報大学

は筆者なりに理解しています。ところで、周りの世界が変わっても全く変わらない人のことを“天動説のお方”と言います。この敬称?には、周りが動いても(変わっても)自分自身は全く動かない(変わらない)という意味と、本当は間違っていることを正しいと信じることにかたくなに固執しているという二つの意味があります。企業ではそのような“お方”は生き残れません。いつの間にか姿が見えなくなってしまう。自分のことを棚に上げて申し上げるならば、さて、大学においてはどのようなのでしょうか?

話しはコロリと変わりますが、学生時代、旧制三高からの古い伝統を誇る京大神稜ヨットクラブに所属して、琵琶湖は浜大津の沖でA級ディンギやスナイプという艇種のディンギ(補助エンジンを持たないヨット)に乗っていました。その、昔取った杵柄の活用ということで、会社勤めをしている頃、仕事の仲間三人で1杯のヨットを手に入れました。その後2度買い換え、3杯目のヨットに今でも乗っています。このヨットは30フィートのセーリングクルーザーで、瀬戸内海の小豆島にある岡崎造船という、レジャーボートの造船所としては世界的に名の通った造船所で建造しました。ハル(船体)は型を使って作られましたが、キャビンレイアウトや艀装品は自由に決めることができました。横浜の市民ヨットハーバーを母港としているこのヨットで、今でも毎年、伊豆諸島方面に出かけています。式根島の“吹ノ江”という、海からしかアプローチできない入江が筆者

らの大のお気に入りです。この入江は、狭い入口の中央に暗岩があって、水路は筆者らの船がようやく通れるほどの狭さですが、中に入ると広々としていて、直径は200メートルぐらいあります。水深は大方2~3メートルで、陸側は崖になっており、奥行き短い洞窟が一つと、一番奥の崖の前に小さな砂浜があります。

セーリングクルーザーはキール(竜骨)の下に横流れを防ぐセンターボードを兼ねたバラスト(重り)がぶら下がっているで、沈(チン:転覆)することはまずありません。“起き上がりこぼし”のようなものです。筆者らの船は、船体重量3.6トンのうち1.6トンがこのバラストです。海が荒れている時は港から出ないようにしていますが、海は突然表情を変えることがあります。航行中に急な気象の変化で海が荒れてきた時は、バラストに守られているから大丈夫とは言っても、ずいぶん怖いものです。ジブセールをストームジブに換え、メインセールをリーフ(縮帆)し、オイルスキン(雨合羽)を着て、コックピットが大波に洗われても落水しないようにセーフティハーネスを付けてラット(操舵輪)を握りますが、実に恐ろしいものです。それだけに港に入った時は本当にホッとします。

海では、その表情の変化に即座に対応しなければ命にかかわるので、否応なしに変化しなければなりません。気象の変化も、世の中の政治や経済の変化も、正確な予測やコントロールが難しく、ある日突然“災難”が襲い掛かってきて、それに対

応(変化)しなければ命はない(倒産する/職を失うなど)という点では共通しているのではないのでしょうか。40年前のオイルショック然り、急激な円高然りです。いずれも突然のつむじ風のようなもので、避けようはありません。自分たちが変化することによって適応しなければならなかったのです。

さて、横浜から約160海里(海のマイル:1,852m)の洋上に浮かぶ八丈島がこれまでにヨットで行った、内地から最も離れた島ですが、「定年退職したら、日本一周しよう」とか、「南太平洋まで行こうよ」などと、ヨット仲間たちと若いころから夢を語り合ってきました。八丈島に行ったときは、心一つの海の仲間4人で午後3時にポンツーン(浮き棧橋)の舳を解いて横浜を出港し、最初の晩に梅雨前線を横切りました。2人一組の2時間交代のワッチを組み、キャビンの中で横になっている時には、体全体がバース(寝床)から浮き上がるほどの激しい揺れに悩まされながらのナイトセーリングで、船酔いには強いはずのヨット仲間たちが、筆者を除いて全員、胃の中が空になるほどの試練でした。梅雨前線を越すと“真夏”の世界に突入です。2日目の晩には、集魚灯を満載したイカ漁船が周りじゅうにいるのではないかと見まがうほどの光り輝く夜光虫の大きな明るい光の塊に目を見張りながら黒潮を横切り、ずいぶん流されましたが、それでも出港した翌々日の朝9時に神湊港に着きました。しかし、「南太平洋」となるとそんなものでは済みませんから、本当に実現できるかど

うかは何とも分かりません。日本一周の方が、港から港をつないで行けばいいので、実現性は高いかも知れません。

さて、民間企業には30余年間勤めましたが、やはり“カエルの子はカエル”ということでしょうか、還暦を2ヶ月ほど過ぎた3年半余り前に本学に着任することになりました。いざ大学の教員になってみると、筆者が子供のころに入れ替わり立ち替わりちよくちよく家に遊びに来ていた、まるで“おじさん”のように思えた大学生のお兄さんたちと比べると、今の大学生がずいぶん幼くなってしまったように感じられました。小さな子供から見た大学生と、人生を一通り歩んだ年寄りから見る大学生で

は、違って見えるのはある意味当たり前でしょうが、それを差し引いても最近の大学生の幼さには愕然とせざるを得ませんでした。そのような学生に対して“学士力”を身につけるよう教育しなければならないのですから、古き良き時代？の大学と同じではやっていけないということはある意味明白なことなのだと、妙に納得したものです。FDが必要とされる所以の一つだと思います。

大学が変わるためには、すなわち教員が変わらなければなりません。“変わる”ということは、多かれ少なかれ痛みを伴うものですが、変化のスピードが一人ひとり異なるのは当然のこととして、それでも、（再び自

分のことを棚に上げて申し上げれば）、断ち切りがたいイナーシャを思い切りよく断ち切るということが求められているのではないのでしょうか。そして、“石橋をたたいて渡らない”という慎重さも時には必要とされることがあるかとは思いますが、今日できることは今日のうちにやっつけてしまおうという意識、そしてW.H.オーデンの言う“見る前に跳べ”という積極さや、“何もしないことを恐れよ”という本田宗一郎の教えこそ、忘れてはならないことだと思います。徒桜になってしまわないためにも。

明日ありと思う心の徒桜 夜半に嵐の吹かぬものは（親鸞）



「主体的な学び」プロジェクトが スタートしました

事業推進責任者 富士 隆

取組名称「主体的な学びに導くためのICT環境構築モデルの開発」で採択された

何故「主体的な学び」が必要なのか？

最近、企業でも「指示待ち人間」が増えているという。「指示待ち人間」とは、上司の指示がないと、自ら行動しないタイプの人のことである。グローバル化が進展している中では、企業でも自ら問題を発見し、考え、行動する人材が求められている。

大学においては、学生の多様化が進展している。大学で学ぶ目的を持っていないままの状態、大学生活を送る学生が増えている。学ぶ目的を持っていないということは、学ぶモチベーションを高める機会が必要で、大学として、その機会を提供することを考えなければならない。

「主体的な学び」プロジェクトは、モチベーションが十分ではない学生を「主体的な学び」に変容させる仕組みを開発し、学生が自ら考え、学ぶ環境を構築することを狙っている。

文部科学省の競争的資金を獲得するために、平成24年度「私立大学教育研究活性化設備整備事業」に応募し（平成24年8月）、採択された。

本取組の、キーワードは、主体的学びのロールモデル、ラーニングアウトカムズの可視化、m（モバイル）ラーニング、アクティブラーニング、シリアスゲームである。

これまで本学のFD活動として取組んできた現代GPや教育GPの成果物を基盤として、さらに「主体的な学びに導くためのICT環境構築モデル」を開発するものである。

「主体的な学び」に導くために必要な要素とは？

多様な学生を主体的な学びができるように転換するためには、3つの要素が必要と考える。1つは、意欲づけ（モチベーション）を高める仕組みの開発である。大学で学ぶことの意義を見出させる仕組み

である。

2つ目は、主体的な学びに導くためのメカニズムを備えた教材の開発である。文字情報や静止画だけではなく、音声、アニメーション、実写動画、シリアスゲームなどによって感動をさせる教材である。

3つ目は、主体的な学びに導くための教授方略である。教育とは、「教授 (Teaching)」+「学習 (Learning)」といわれているように、Teaching主体の授業展開からLearningを取り込んだ授業運営(含む授業前の学習、授業後の学習)が必要となる。これは、2つ目の教材と連動した授業運営(アクティブラーニング)が求められる。

「主体的な学びへ導くためのICT環境構築モデル」の概要

本モデルは、「学生のモチベーションを高める仕組み」、「学生参加型の授業モデル」、「mラーニング環境」から構成される。(図1、図2)

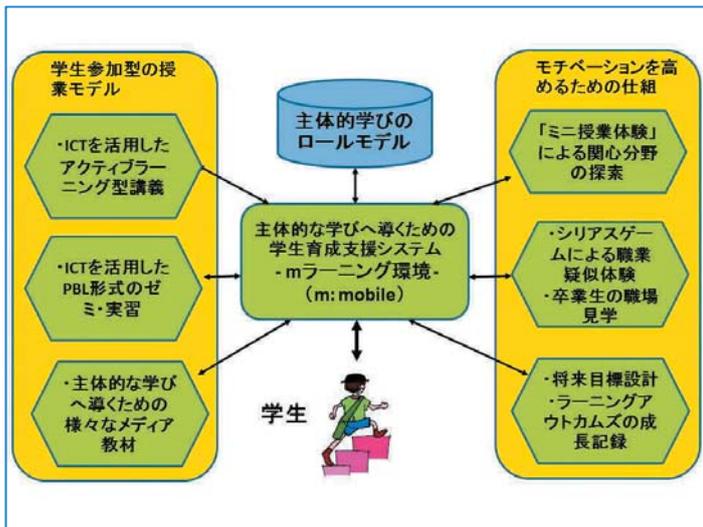


図1 主体的な学びへ導くためのICT環境構築モデル(概念図)

(1) 「学生のモチベーションを高める仕組み」

①多様な学生に対して意欲(モチベーション)を高めるために、卒業生の職場での活動実態(動画等)の紹介、シリアスゲームによる職業疑似体験等によって卒業後の職業イメージを具体的に持ちながら、関心のある職業を探してもらう。

既に、代表的な業種から10企業(含む病院)を選定し、そこで活躍している先輩の生の姿を取材している。先輩から後輩への具体的なメッセージは、学生への良い刺激になると期待している。これらの取材活動は、学生サポートセンター事務室とメディア教育センター(MEC)の協同作業で進められてい

る。

②教員プロフィール、ミニ授業(動画)、授業科目と社会との関わり等の「ミニ授業」を効率よく閲覧することで、北海道情報大学では、どんなことが学べるのかを概観してもらう。そして、その中から、関心のある分野を探索する。

③学生が、自らの将来設計、大学4年間での学習プラン、当面の前期・後期に学習プランを立て、週間活動実績を把握しながら、自らの活動をふりかえる情報を提供する。そして、学んだ学習成果(ラーニングアウトカムズ)をわかりやすく可視化し、自らの成長を確かめることができるような情報を提供する。(現代GPの成果物であるPOLITEを活用)

(2) 「学生参加型の授業モデル」

①主体的な学びに導くための教授方略(例:アクティブラーニング、PBL等)の具体的な展開方法を検討、試行しながら確立していく。(教育GPの成果物であるCANVASの活用)

②主体的な学びに導くためのメカニズムを備えた教材開発の手法をMECと共同で開発を進めている。ビギナーズセミナーで使用される教材から試行していく予定である。アニメーション、実写動画、シリアスゲームなどによって学生のアテンション(興味、関心)を引き付ける教材を目指している。

(3) mラーニング環境

①授業、授業前の学習、授業後の学習が、いつでも、どこでも出来るようにiPad等を活用したm-Learningの環境を提供する。

②「主体的な学びのロールモデル(お手本)」を学生に示すことで、主体的な学びの具体的なイメージを持ちやすくする。

③その他に、課外活動(クラブ、委員会等)での活動実態(活動内容、学生の声など)の情報を学生が主体的に収集、公開する仕組みを提供すること

で、より豊かなキャンパスライフを支援する。

ルの検証と改善を行い、本モデルの定着化を図る。

開発、移行計画（5か年計画）

本プロジェクトは、平成24年度から開始して、5年間の取組である。

・平成24年度：

「主体的な学びに導くためのICT環境構築モデル」のシステム開発が中心である。採択時期の関係で平成24年12月から開始している。

・平成25年度：

開発した主体的学びへ導くためのICT環境構築モデルを経営情報学部システム情報学科の1年生で試行、実施しながらシステムの改善を図る。

・平成26年度：

開発した主体的学びへ導くためのICT環境構築モデルを全学部の1年生で実施する。その間、システムのブラッシュアップを図る。

・平成27年度：

開発した主体的学びへ導くためのICT環境構築モデルを全学年で実施する。全学的な運用を試行しながらシステムの改善を図る。

・平成28年度：

開発した主体的学びへ導くためのICT環境構築モデル

全学的な推進体制

プロジェクトを成功させるためには、プロジェクト計画を完成させるための、しっかりした予算措置が必須である。本プロジェクトは、文部科学省に応募するための原案作成時から、中居常務を中心に十分な検討を行った。

「主体的な学び推進協議会」が、本プロジェクトの総括を行う。本モデルの具体的な研究、開発、推進は、全学教務・FD委員会およびFD推進連絡会議と主体的学びプロジェクト開発会議（eラーニング推進センター運営委員会）が担当している。委員会のワーキンググループ（WG）で、直接関わるものとして、「WG4（ICTの活用推進）」、「iPad（タブレットPC）導入検討WG」、「シリアスゲーム教材開発WG」、「将来履修モデル検討WG」等が活動している。

本モデルで取り組んでいる内容は、他大学に先駆けて実施するものであり、多くの課題を解決しながら推進する挑戦的なプロジェクトである。教職員一丸となって取り組んでいる。

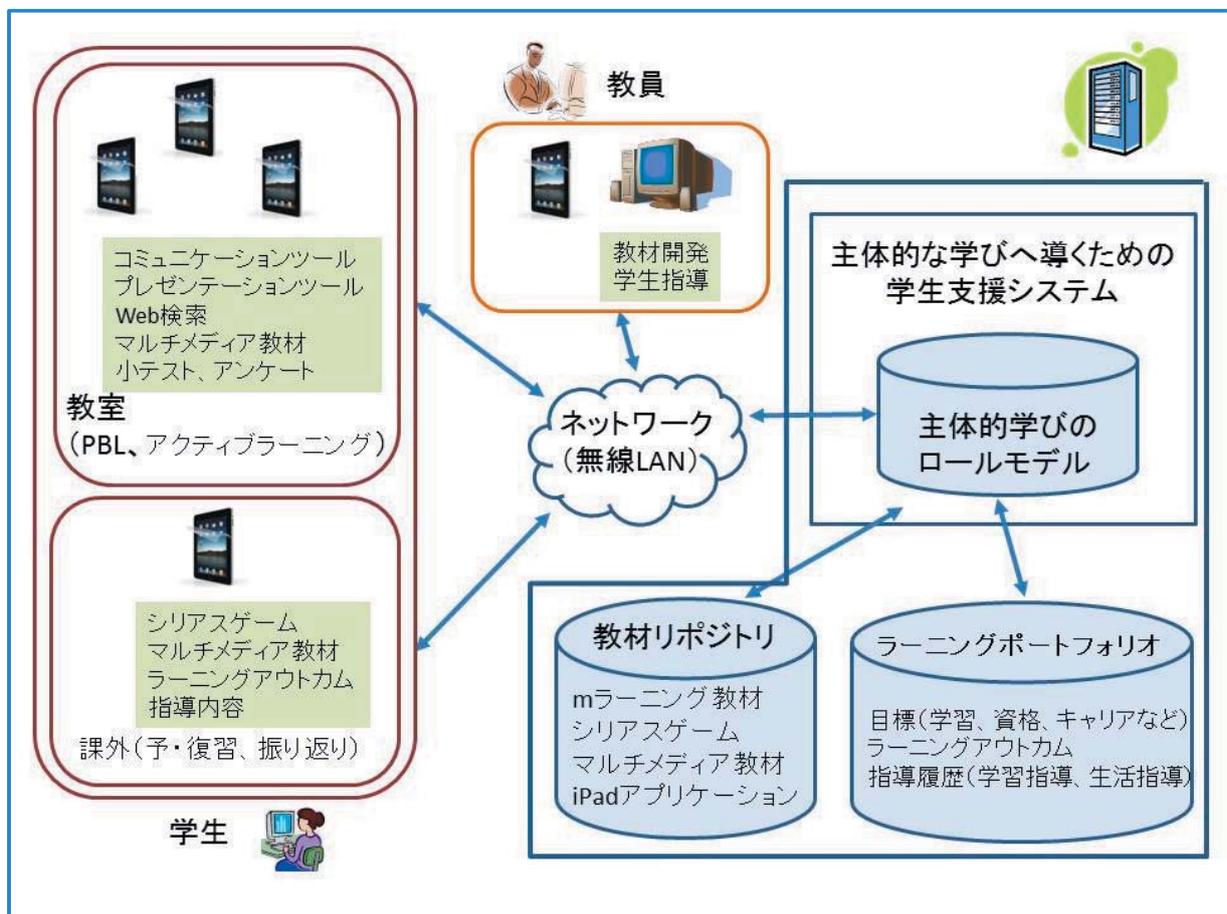


図2 主体的な学びへ導くためのICT環境構築モデル（システム構成図）

入学前教育の実施について

教務課長 木田 洋

本学では初めての試みとなりますが、入学前の学生に対し、早期の人間関係作り、学習上での問題の解消を目的として、いわゆる“入学前教育”を実施することとなりました。

これは「退学対策に関する提言・最終報告（平成23年11月7日）」で提言されていたものを、約半年かけて実施計画を作成し実施したものです。

内容は、早期の人間関係作りは「仲間作り」、学習上での問題の解消は「基礎学力補充」として計画し、本年度は試行的に本学のみを会場として実施しました。

1. 「仲間作り」

4月からの入学予定者に、本学のクラブ・サークル等の紹介、中村正巳教授による「ふれあいゲーム」などを行い、入学前から仲間や先輩たちとのコミュニケーションを行い、スムーズな大学生活への移行を目指し実施しました。対象としたのは推薦入試・AO入試での入学手続き者で、事前に希望を募り2月8日（金）に実施しました。

当日は11:00に講堂に集合し、受付・交通費精算の後、説明を聞きたいクラブの先輩たちについて体育館・各教室に移動し、細かい説明を聞いていました。



食堂でのバイキング

お昼は、先輩たちの案内で、学生食堂、カフェレストランに分かれ、バイキング形式で食事をしました。食事中も先輩たちとクラブの活動内容や本学で学生生活について話し込んでいました。

食後は再び講堂に集合し、2つ目のクラブ説明を聞くために体育館・各教室に分かれていきました。

今回はクラブ説明の学生を確保することもあり、早い時期での実施となり、対象者を推薦入試・AO入試での入学手続き者のみとしました。また、自由参加としたため、参加者が約100名とやや少なくなりましたが、参加者はクラブへの興味が強い学生が多かったように感じました。また、アンケートの内容も“参考になった”という声が多かったようです。



クラブ・サークル紹介



英語の講義

参加したクラブ・サークル等は以下の25団体です。ご協力ありがとうございました。

硬式野球部、軟式野球部、ストリートダンスサークル、Yosakoiソーランサークル、Computer Operating Club (COC)、映像研究部、DTMサークル、Sound Terminal、ボランティアサークル、総合創作サークル (SSS)、吹奏楽部、写真部、異文化交流会、演劇部、執筆部、天文サークル「アルビレオ」、現代美術研究部、ドイツゲーム同好会、ソーシャルミュージックサークル、散歩写真同好会、釣り同好会、HIU書道サークル、商品開発部、学生FD、メディアデザイン展実行委員、中村正巳先生ふれあいゲーム

2. 「基礎学力補充」

「仲間作り」と同様に推薦入試・AO入試の入学予定者に、まず課題プリント教材を配布し、その後、その課題プリントに基づいた対面の学習指導を行いました。課題プリントの配布・提出は従来も推薦入試・AO入試の入学予定者に行っていましたが、今回は本学で対面による指導を行うという新しい試みをしました。

2月26日(火)と3月7日(木)の2日程に、英語の座学指導、英語のeラーニング、数学の個別指導の3つのプログラムを設定し、事前にどの日程のどのプログラムをどういう順番で受講したいかの申込を募りました。午前：英語(座学)、午後：英語(eラーニング)→数学(個別指導)のように自分

でスケジュールを組んで受講する形としました。

両日とも11:00に講堂に集合し、各自の選んだプログラムに従い、各教室に分かれて講義、指導を受けました。

数学は個別指導のため両日とも6名の先生が個々の学生の質問に答える形で指導を行いました。

受講人数は、2月26日(火)約70名、3月7日(木)約30名でした。こちらも推薦入試・AO入試の入学手続き者のみを対象とし、自由参加としたため、やや少ない参加者数ではありましたが、課題プリントが理解できるまで熱心に指導を受けていました。

課題プリントは3月12日(火)締め切りで提出され、添削・採点ののち本人へ返却されます。今回の学習指導により各人の弱点が解消され、入学後の学習につながることを強く願っています。



数学の個別指導

EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCE 参加報告

情報メディア学部 准教授 安田 光孝

はじめに

2012年11月6日から9日にかけて、米国コロラド州デンバーに赴き、「EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCE」に参加して来ました。会場は、デンバーのダウンタウンにあるコロラド・コンベンションセンターです（写真1）。紙面の都合もあり、セッション等の具体的な報告を本稿にて行い、概要的な報告は本学学内報「ななかまど第57号」に記しますので、そちらも併せてご参照下さい。なお、内容的に重なる箇所もあります。

EDUCAUSEについて

さて、EDUCAUSEとは、アメリカの教育関連の非営利団体（NPO）のひとつで、ICTの積極的活用によって高等教育を進歩させることを使命としています。全米の2200以上の大学・高等教育機関と、250社以上の企業が加盟しており、規模としては全米最大級を誇ります。年に一度開催されるANNUAL CONFERENCEには、教員だけでなく、一般職員、大学CIO、図書館司書、大学Web運用担当者など、実務者が多く参加し、発表するのが特徴的です。また、研究的な発表より、実践的な取り組みの発表が多く、何にどう取り組み、どうなったかのベストプラクティスを実務レベルで共有し合うと

ころが学会とは違ったものになっています。今回のカンファレンスの参加者は、7728名で、そのうち海外からは49カ国714名が参加しました。日本からはそれほど多くはなく、40名が参加しました。企業の参加は270社以上にもなるとのことでした。

日本にもEDUCAUSEを参考として、2010年12月に「大学ICT推進協議会（AXIES）」が設立され、本学も設立当初から加盟しています。2012年12月に行われた年次大会の参加者は653名で、企業が38社でした。EDUCAUSEと比較すると圧倒的な規模の違いがありますが、日本でも教育を支えるICTの重要性が年々増す中で、AXIESの存在感も日に日に増してくると思われれます。特に本学では、大学の戦略や教育手法・効率化の観点でICTをどう活用していくかはひとつの重要な課題であることに間違いのないでしょう。筆者はEDUCAUSEのカンファレンスには初めて参加しましたが（写真2）、こういったカ



カンファレンス会場にて（写真2）



コロラド・コンベンションセンター（写真1）

ンファレンスに参加して、海外の最新情報を共有するのは本学にとって非常に有益な機会であり、教員だけでなく職員も積極的に参加することが必要なのではと感じました。

そういった中、特にEDUCAUSEでの筆者の一番の驚きは、米国では大学にCIO (Chief Information Officer) なるICTマネジメントを行う役員が常職的に置かれていることでした。日本の国立大学法人でもCIO (情報化統括責任者) を設置することが求められたようですが機能が十分に発揮されていないのが現状とのことです。EDUCAUSEのカンファレンスでは、このCIOが集まるラウンジが用意されており(写真3)、CIOに限定したセッションも多数開かれていました。そこで各大学が共通に抱える課題やそれに対する取り組みを共有出来るようになっていくことは、このカンファレンスのコンセプトが体现されていると感じました。



CIO専用ラウンジの告知 (写真3)

EDUCAUSE2012 ANNUAL CONFERENCEのテーマ

2012年度のカンファレンスのメインテーマは、「Rethink the rules.」でした(写真4)。写真を見ていただくとわかるように、その下に「New Technologies. New Models. New Possibilities」「The game keeps changing. Are you?」とサブタイトルがあります。この「Game」という言葉。セッションのタイトルにも多く使われており、今回のキーワードのひとつになっているようでした。筆者はてっきり、最近の「Gamification」あるいは「Serious Game」などと言われる「教育にGame的要素を取り入れていく」というトレンドを反映してのテーマ設定かと勘違いしていました。しかし、こ

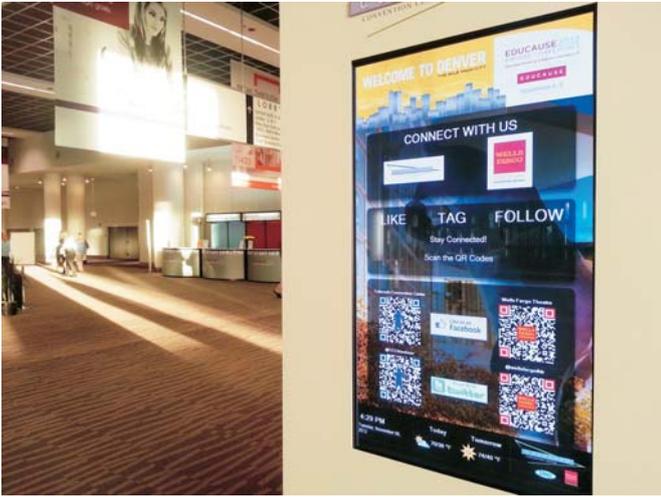
れは、「Game Changer」という“途中で交代して試合の流れを一気に変えてしまう選手。転じて、世論の動向を大きく変える人物や出来事”という意味合いから来ていることがわかりました。これはメインテーマに照らし合わせてみると合点がいきます。今のアメリカでは、今までないスピードで社会が変化しており、教育においても今まで通りのやり方をしていてはその変化に追いついていけない。今こそルールを見直して、新しい変革を起こす必要がある。そのためにはやり方も教育モデルも、そしてそれらの可能性もゼロから見直して、一気に試合の流れを変えなければならぬのだという気運が高まっているのだと思います。



カンファレンスのテーマ (写真4)

セッション&セミナー

カンファレンスのセッション(発表)ですが、セミナー(ワークショップ)等含めると全部で400以上の発表があり、その分野は多岐にわたります。それらは、Enterprise Information System, Infrastructure, Leadership/Management, Libraries/Research, Support, Teaching/learningという大きな4つのドメインからなり、16のテーマに別れます。もちろん、最近のICTのトレンドを反映して、Cloud、Social、Big Data、Openなども発表のキーワードとして含まれています。また、大学Webサイトデザイン、キャンパスセキュリティ、3Dプリンターの話など、ちょっと教育と直接的には関係のないテーマのセッションもありました。全てのセッションは、Web、スマホアプリ、kiosk端末、サポートデスクで検索でき、参加者もFacebookやTwitterでリアルタイムにセッションの状況を共有できるようになっています(写真5)。



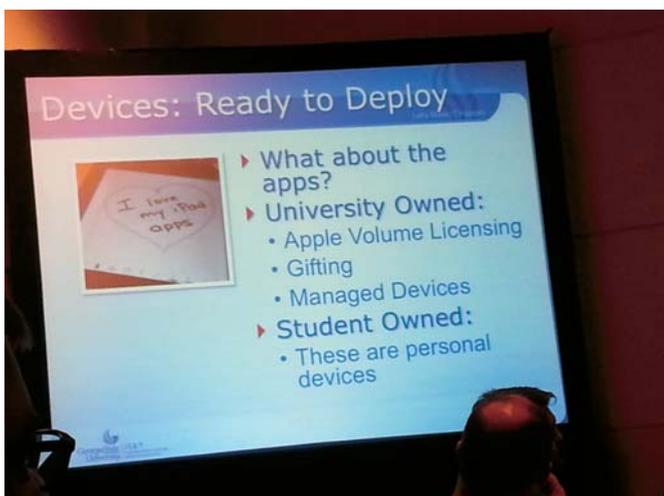
SNSの掲示（写真5）

その中でも大きなトピックになっていたもののひとつが「BYOD」です。これはBring Your Own Deviceの略で、日本語では「私的デバイス活用」と訳されます。本学でも、2013年度から110台のタブレット端末を試験的に学生に貸し出し、タブレットやスマートフォンなどのスマートデバイスの活用とBYODをどうするか、検討が始まります。スマートデバイスの活用とBYODについては、セッションでも非常に多く取り上げられていました。その2つを筆者のメモからご紹介します。

“You can get there from here!; Strategies for Planning Academic Mobile Initiatives”

by Julian O. Allen/ Joe Horne, Georgia State University

iPadを複数の学部で導入する上で、ステークホルダーは何に気をつけてどうすればよいのかをディスカッションするワークショップでした。自分たちの経験を踏まえてiPad等のスマートデバイスを導入する際のポイントが何かを説明してくれました。まず、デバイスを誰が所有するのがよいのかは、各大学の



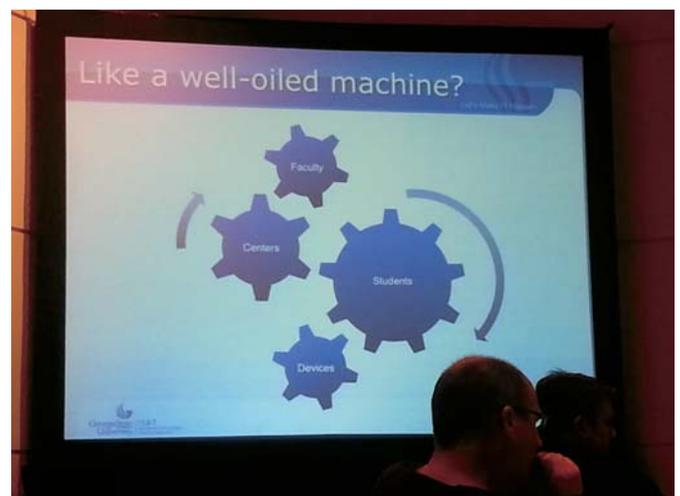
デバイスを導入するために（写真6）

状況に応じてメリット/デメリットを検討するとよいとのことでした（写真6）。大学側が持つ場合、デバイスを大学側のルールに合わせて管理できますが、学生にとっては自由度が少なくなる。学生の立場に立って考えることが大切であるということです。また、導入にあたっては十分なサポート体制が必要で、インフラの面でもWi-Fiネットワークの強化が必要。加えて、学生が学ぶ上でデバイスの使用目的が明確で、講義でのデバイスの使用が有益であることがポイントとのこと。総じて、デバイスの導入を成功させるためには、教職員、サポートセンター、学生、そしてデバイスが相互に円滑に回っていくことが重要とのことでした（写真7）。

“He Gets an iPad, She Gets an iPad, Everybody Gets an iPad! Now What?”

by Dan Alig, The Wharton School, University of Pennsylvania

500台のiPadを学生に無償で配布した際に何を学んだかを説明してくれました。Appleから納品されて2ヶ月間で、環境を設定し、配布する準備をしたとのこと（写真8）。大学側がデバイスを購入することで、専用のWebを設定し、アプリを事前にインストールし、学生にデバイスを使用するメリットを与えられた（写真9）。しかし、デバイスの環境設定とアプリのインストールは、手作業でやらざるを得ず、非常に手間がかかったと言っていました。学生にデバイスを積極的に使わせるために授業の配布物は全てそのアプリから閲覧出来るようにし、また、教科書や書籍を購入できるサービスも複数付けた。しかし、まだ学生や大学が望んでいる理想的なコンテンツや閲覧環境は提供できていないし、これから特にソフト面での充実をはかる必要があるとのことでした。



相互に円滑に回す（写真7）



iPadを配布 (写真8)



専用アプリを用意 (写真9)

ポスターセッションと企業ブース

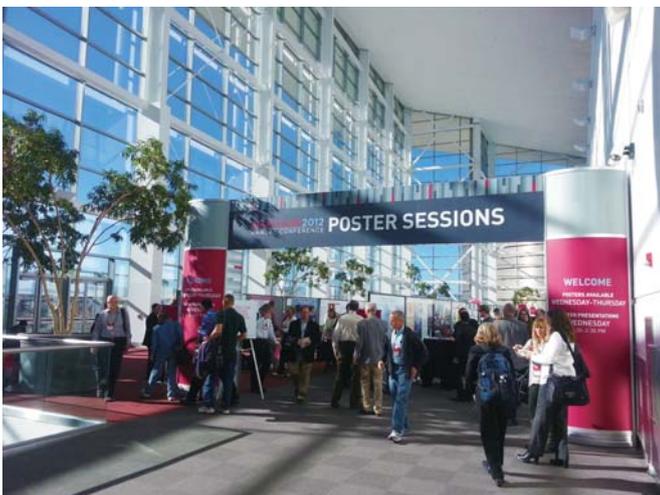
会場の2階にはポスターセッション (写真10) があり、その横のExhibit Hall会場には、270社以上の協賛企業がところ狭しとブースを展開していました (写真11)。1階のセッション中心の雰囲気とはガラリと変わり、このフロアには、人が溢れていました。いわゆる有名なICT企業もブースを出していましたが、知らない企業名が目抜き通りに目立って並んでおり、当然のことながら知らない会社って多いのだと実感しました。あるセミナーで、日本の総合商社の方と話す機会を得ましたが、米国に比べ、日本の教育業界ではICT企業が少ないとのことでした。商社もあまり積極的に海外の教育分野における業務用パッケージソフトを輸入して来なかったということです。その理由として日本の教育環境が独特なことがあげられるようです。しかし、今後は海外の教育向けICTソリューションにも目を向け、日本にも業務用パッケージソフトやサービスを売っていくという話でした。

おわりに

以上のように、EDUCAUSE ANNUAL CONFERENCE 2012について報告して来ましたが、そこで感じたのは、やはりアメリカの変革に対する意識の高さとスピードの速さは日本と比べると圧倒的だということです。そして、やはり日本より一歩先、二歩先をいっている感があります。しかし一方で、本学も同じような取り組みをしており、それほど遅れている感じでもないなあという実感もありました。特にスマートデバイスに関しては、本学もまだ追いつけないところにいるわけではないと。また、こういったカンファレンスに参加して、海外の最新の状況を知ることができ、今までとは違った視野が生まれたことは、筆者にとって大きな変化でした。海外の状況等にも目を向けて、本学の更なる改善に繋げて行きたいと思っています。

2013年度のカンファレンスは、10月15日から18日、カリフォルニア州アナハイムで開催されます。

(<http://www.educause.edu/annual-conference>)



ポスターセッション会場 (写真10)



企業ブース (写真11)

2012 年度 FD フォーラム開催

2012 年度北海道情報大学 FD フォーラムは、「教職員の個人力とFDの組織力で築く大学の将来」と題して、平成 25 年 3 月 1 日 13 時より本学 211 教室にて開催いたしました。

FD フォーラムは、山北 情報メディア学部長の司会により、長谷川 学長から参加者への「小笠原先生のご講演(第 1 部講演会)を賜り、ディスカッションを深めて下さい。」との開会の言葉で開幕しました。

これまでの FD フォーラム同様、第 1 部は、講演会、第 2 部は本学 FD 活動の報告というプログラム

FD フォーラムプログラム

開会挨拶

第1部 講演会

第2部 活動報告

FD 活動の概要報告

各ワーキンググループ等の報告

学生 FD の活動報告

閉会挨拶

で実施された今回の FD フォーラムについて、簡単にまとめご報告します。

第 1 部 講演会

講演者として、北海道大学名誉教授であり大学教育学会会長もお務めの小笠原 正明氏を招き、「中教審の「新たな未来答申」(2012 年 8 月)の主張と限界」と題してご講演いただきました。

小笠原氏は、「中教審に対して、インサイダーではないが、部外者でもない」と自らの立場を説明され、2012 年 8 月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(以下、「新たな未来答申」と略します)にある迅速な改革が必要とされているとの記述を示されました。この中で学士教育に対する不満が明確にされているが、その原因は、1980～90 年代の戦略的な失敗にあり、戦略的に取り組まなければ、失地回復は望めないとのことをお考えを示されました。

「新たな未来答申」では、大学教育が「アクティブラーニングへの転換」を求められているとし、知識中心型から課題解決型へ、大学教育のパラダイムシフトが起こっていると述べられました。この課題解決型授業の在り方についてディスカッションや演習実験が有効であると示してくださいました。

さらに「新たな未来答申」には、「学修時間」を確保し学生の主体的な学びを確立することが必要だとも述べられていることを示されました。この「学習時間」の確保



については、学士課程の建前と実質と実際がすべ異なっているということが問題であると指摘されました。学士課程の柱である「コースワーク」(＝通常の講義)と「ラボワーク」(＝卒業研究など)について、教員は両者を比して、ラボワークこそ根幹だと考えているのに、学修単位としての比率はそれを反映していない。そのため実体としてはコースワークにひずみが生じ、日本の大学生は、主体的な学びを期待できない「大学生として異常な生活を送っている」との見解を示されました。コースワークでは、授業回数が足りず、実質は名目の単位に対して半分であること、形式的にはいくらでも授業を詰め込めるので、ダブルスクールなどというこが名目上可能であることなど、我々にとっては少々耳の痛い問題点を示されました。

こうした問題に対して、戦略転換を図るために留意すべき 5 つの条件と、より具体的に大学教育改善への工程を示されました。改善のヒントをいくつも頂いたわけで

すが、とりわけ、少人数教育は重点化せよ、授業におけるフィードバックは重要、本来は評価には口頭試問が良い、カリキュラム、コースレベルのルーブリック(到達度評価)が必要、などが印象に残りました。

ご講演後の質疑応答では、具体的な授業の工夫、コースワーク、授業でのフィードバックなど多岐に渡る質問に対し、ルーブリックを作ることの難しさ、集中的履修という本来の意味でのセメスター制の重要性など、戦略的な視点からの貴重なお答えをいただきました。小手先

の戦術では無く、戦略的に問題解決を図ることを示唆されましたから、我々はこれを糧に、中長期的視点を持ちながら早急な改革を進めて行く必要があるでしょう。



第2部 活動報告

第2部ではワーキンググループ(以下WGと略記)毎に活動報告がありました。富士 全学教務・FD委員会委員長より、ICT活用については、POLITEの利用が進んでいること、FD支援システムCANVASを活用したPDCAサイクルによる授業改善について、Plan、Checkが100%実施されているのに対して、Actionの実施が40%以下にとどまっております改善努力を要すること示されました。

学生による授業評価アンケートに取り組むWG1からは藤井先生が、Webを利用したアンケートに変更した後、アンケート回答数が低下しているデータを示され、回答数増にむけた取り組み、タブレット端末を利用する形態の検討などの課題を示されました。

ピアレビュー制度導入に取り組むWG2からは向原先生が、過去9回のピアレビューについて、全教員が取り組んだことは、きわめて希な事例であり誇るべき成果であると報告されました。

GPAとコンピテンシーの導入に取り組むWG3からは豊田先生が、2010年度から本格的に導入し、いよいよ次年度は、全学年の学生が在籍期間のGPAによる評価を受け全にわたって通算GPAが付与されている状況になり、本格的に活用していく段階に入るとことが示されました。

谷川先生はICTの活用を推進するWG4とiPad導入検討WGについて、ICTを利用したコンピテンシー可視化の成果と、次年度施行されるiPadの授業での利用について報告されました。

FD関係のイベントと教育活動支援情報企画を行うWG5からはソーラ先生が、ポスター制作や新任教員研修会について報告されました。

カリキュラム開発について検討しているWG8からは、富士先生が、カリキュラム・アドバイザーボードの開催とカリキュラムポリシーなどの作成について報告されました。

Own Teaches制度導入に取り組むWG9からは長井先生が、教育アドバイザーに関するアンケート調査の結果からその定着の様子について報告されました。

卒論の書き方作成WGからは、ご不在の隼田先生にかわり山北先生から、卒業論文にとどまらず卒業研究全体を対象とした卒業研究の手引きが作成され、提供されていることが紹介されました。

シリアスゲーム教材開発WGからは斎藤一先生が、就業体験のためのシリアスゲーム開発とその成果を示され、今後もシリアスゲーム教材の開発をしつつ、シリアスゲーム活用の提言についても行っていきたいと説明されました。

将来履修モデルの検討WGからは、向田先生が学生の現状分析を示され課題の認識を示され、1年後をめどに履修モデルの提案を計画していることを明らかにされました。

プログラミング教育WGからは、斎藤健司先生が、プログラミング教育の難しさを問題点として分析し、他大学での工夫などを参考に対策を検討していると報告されました。

安田先生は、EDUCAUSE2012についての報告がありました。(関連記事をご参照ください)

最後に、学生FDの活動報告として、2学年在籍学生さんから活動の趣旨と、現在のメンバー構成、学生FDで学んだ多くのことと、次年度の活動目標について説明がありました。

総じて、今年度も活発なFD活動が成されていると感じられました。

ピアレビュー制度の導入支援の成果と 今後の課題

WG2リーダー 先端経営学科 教授 向原 強

平成20年度後期から全学的なピアレビューを開始し、早いものでまる4年が経ちました。これまで9回のピアレビューを実施したことになります。このピアレビューを支援するため活動してきたのが、ピアレビューを担当している我々WG2です。数あるFDのワーキンググループの中でも、FD活動の先駆的な役割を担ってきたと自負しています。当初はピアレビューという言葉さえ認知度が低かったと思いますが、現在では、良い意味でも悪い意味でも、ピアレビューは本学教員にはおなじみのワードになりました。なにしろ、本学では、年に2度のピアレビューを全教員が実施しているわけですから当然のことだと思います。FD推進スタッフのメンバーとして国内外の大学を視察してきましたが、本学のようなピアレビューを実施している大学はありませんでした。これもひとえに教員の皆様の協力の賜であり、本当に感謝しています。本稿ではその感謝の意を込めて、WG2の成果についてまとめてみたいと思います。

皆さんもご存知の通り、ピアレビューという仕組みは、米国において常勤ではない教員を評価するために活用されてきたという経緯があります。しかし、我々WG2が目指すピアレビューは、授業改善の手法であり、教員評価であってはならないと考えました。その基本理念を第一義に制度の導入を進めたことが、これまで制度の導入がスムーズにいった一番の理由ではないかと考えています。

この4年の間に、ピアレビュー制度が本学の教員に受け入れられ、うまく運用できるように様々な工夫がなされてきました。

第一に、授業を行う先生（授業者）と授業参観をする先生（観察者）との関係が対等であることを確認しました。観察者が授業者に対して、上から目線であればどうしても授業者に対する指導的な意味合いが強調され、教員評価につながってしまいます。そうではなく、授業者のノウハウを観察者が獲得し、授業者はピアレビューによって襟を正す環境を構築したいと考えたわけです。そのために、ピアレビューを実施する前に配布する実施要領には、「ピアレビューの留意点」という注意事項を掲載しまし

た。これは授業参観の後実施される事後検討会の雰囲気作りを目的としたもので、まずは授業者をほめるところから始めること、授業者のよいところを発見するように努めることを記載しています。ピアレビューの報告書は記述式とし、点数をつけるような定量的な要素を排除したことも同じ理由です。

第二に、単に授業を参観するのではなく、観察者自身が、授業者の授業に積極的に関与してもよいこととしました。いわゆるチームティーチング（TT）です。ピアレビューはTTの一つの機会を提供することができました。例えば、先端経営学科では、東日本大震災の復興支援策をテーマとして、ゼミ単位で検討し、発表するイベントを実施しました。ゼミ担当教員はゼミをまたいで、学生を指導することができますし、他のゼミの方法を知るよい機会となります。

第三に、FD支援システムCANVASの利用です。ピアレビューの実施報告書は当初、メールで送付する形式をとっていましたが、平成22年度以降は、CANVASで提出する仕組みとなりました。前に述べた通り、FD委員会が発足した平成20年度より全員がピアレビューを実施していましたから、本学の教員にとってCANVASを知る最初のきっかけとなりました。CANVASを利用することで、教員のピアレビュー実施状況をリアルタイムで管理できるようになりましたし（図1参照）、Excelで作成していた実施状況表を自動作成することもできるようになりました。WG2の事務方をお願いしていた事務作業がずいぶん楽になったわけです。実際、WG2には事務方のメンバーも加わっていますが、現在では管理の目的としては、事務方の手を煩わせていません。

第四に、データの活用環境の整備です。これはCANVAS利用によるメリットでもあるわけですが、ピアレビューの報告書に蓄積された知見は、教員間で情報共有することが可能となります。図2は、CANVASで見ることのできるピアレビューの知見を表示した例です。このシステムを利用すると、良い面も悪い面も含めて、他の教員のもつ授業のノウハウを知ることができます。

たった4年の間ですが、WG2のメンバーや、メディア教育センターの前田さんらの協力により、本学のピアレビュー制度が高度化したように思います。

これらの工夫がもたらす一番の成果は、教員の皆さんが、当たり前のことを当たり前のようにするようになり、ピアレビューを実施するようになったことに

CANVAS Creative Activity for Nurturing Value-Added Students

向原 強 WGリーダー

ピアレビュー状況一覧

メニューに戻る

年度 平成24年度 学期 後期 対象外教員 設定 CSV出力 Excel出力 メール送信

学科 全て 状態 全て 重複表示 フィルタ件数 76

分類	教員番号	授業者氏名	科目名	授業実施日	投稿者氏名	状態
経営	1178021	今井 希	経営戦略II	2012-12-10	富士 陸	事後検討会完了
経営	8725311	遠藤 雄一	サプライチェーンマネジメ	2012-12-11	中村 忠之	事後検討会完了
経営	1088021	金間 大介	ビジネスコミュニケーション	2012-11-02	長井 敏行	事後検討会完了
経営	9988011	坂本 英樹	マーケティング論	2012-12-11	谷口 文威	事後検討会完了
経営	0288011	谷口 文威	Webアプリケーション開発	2012-12-21	坂本 英樹	事後検討会完了
経営	0578011	中村 忠之	e-ビジネス応用	2012-12-07	遠藤 雄一	事後検討会完了
経営	8873901	長井 敏行	財務分析論	2012-11-02	金間 大介	事後検討会完了
経営	9165051	富士 陸	ソフトウェア工学	2012-12-18	今井 希	事後検討会完了
経営	1288012	松本 紗矢子	管理会計論II	2012-11-30	向原 強	事後検討会完了
経営	0188081	向原 強	コンピュータ会計	2012-10-31	松本 紗矢子	事後検討会完了
情報	1188011	尾崎 博一	情報伝送I	2012-10-26	豊田 規人	事後検討会完了

100%

図1：CANVASによる管理表

あると思っています。当初はWG2のメンバーが諸先生に色々お願いをしようやく完了していたピアレビューですが、ここ数回は、WG2の手をほとんど煩わすことなく完了しています。制度がルーチン化した証拠だと思えます。このプロジェクトを支援してきたリーダーとして嬉しくも思いますし、WG2の果たすべき役割も、一つの区切りを迎えたように思う

のです。FD活動の自律的なPDCAを支援することがCANVASの目的です。あえて課題を挙げるとすると、各教員がCANVASを通して、授業改善につなげる知見を積み上げていくこと、また、それをWG2の手を煩わせることなく実現することにあると思います。

成功・失敗事例集

事例の登録

自分の事例を登録する 他大学の事例を登録する

研修ビデオの視聴

5分でわかるFD研修ビデオを視聴

表示内容選択

ピアレビュー 授業の運営方法 学生の参加度 黒板、PPT、配布資料等の活用 その他

ICT活用 POLITEの活用 クリッカーの活用 Turnitinの活用 その他(選択してください)

教授方略 マインドマップ アクティブラーニング その他(選択してください)

ピアレビュー記事 絞り込み検索

年度 全て 学科 全て 授業形態 全て 受講者数 0 ~ 999 絞り込み実行

検索結果: 508件

参考になった	科目名	内容	登録日時	区分
参考になった 0人	メディアリテラシー	参考になった点 授業中に出てきたゲームボーイなど実機を提示することで、興味理解を高めていた。	2013-01-21 11:55:19	ピアレビュー 詳細
参考になった 0人	日本語表現II	参考になった点 先生は、最初に配布資料を配りました。その次にそれを5分で書くように学生に指示をして、時間が終わると提出をさせました。その後、新しい資料を配って、黒板に説明してきました。 二番目のprintが「定義」にかんするものでした。そして、次々学生に定義のprint枠を出して読ませて、その発音と文法などをcheckしてきました。Printの裏にある練習問題を解くように指示して、そのできacheckしてきました。 アドバイス 特に問題なし	2013-01-21 08:27:48	ピアレビュー 詳細 講義VTR
参考になった	臨床医学II	参考になった点 臨床医学Iは範囲も広く、指導方法に関心を持って臨みました。 資料(配布プリント)には、1年生で履修した解剖学の復習も網羅されていて、全体的な把握も容易で、授業中に何度も指導されていました。	2013-01-16 16:35:25	ピアレビュー 詳細

図2：CANVASにおけるピアレビューの知見

「学生による授業評価アンケート」の状況報告

WG1リーダー 情報メディア学科 教授 藤井 敏史

本学の「学生による授業評価アンケート」の特徴はwebで実施していることです。他大学での先行事例では、アンケートの回収率が数%程度に落ち込んでしまいアンケート用紙を使う方式に逆戻りしたケースが多数報告されています。本学の場合は、教員から学生へアンケートの重要性を丁寧に伝えることと、学生ポータルサイトにおけるアンケートの優先度を高めることにより約30%の回収率を達成しています。ここでは、授業評価アンケートに関する状況を報告します。

1 学生の回答状況

本学でこれまでに実施して来た授業評価アンケートでの回答件数を表1に示します。webで実施するようになったのは2008年度の後期以降で、それ以前はアンケート用紙を使用していました。紙で実施する場合と比較して、webで実施する場合の回答件数は、残念ながら約半減する結果となっています。

表1 授業評価アンケートの回答件数

年度	前期	後期
2012	5,118 件	3,135 件
2011	4,855	3,570
2010	6,698	3,646
2009	5,878	4,322
2008	10,698	4,116
2006	10,892	8,235
2004	10,067	8,340

背景が緑：webで実施、背景が白：紙で実施



図1 授業評価アンケートの回収率

図1にアンケートの回収率に関するデータを示します。従来は、履修登録者全員に回答を求め、履修登録者数を分母として回収率の計算していました。しかし、アンケートの精度や、回収率の値の意味を考えると、この取り扱いは適切ではありません。そこで、2010年度からは、試験有資格者数（授業の出席率が所定値以上の学生）だけが回答できるようにシステムを変更しました。学生がアンケートに回答するときは、時間割を模した画面に試験有資格科目だけが表示されます。

2 授業評価アンケートは役立っている？

アンケートの集計結果は担当教員に配布され、教員は自己分析を実施します。学生の評価と自分の想定との比較を行い、その結果に基づいて次年度の授業における改善を検討します。FD活動のPDCAサイクルのC(Check)に該当します。

2012年度前期の自己分析においては、次の質問を用意して教員からの回答を集計しました。「今回の授業評価アンケート結果の中に、授業改善につながるデータはありましたか？」

回答は「多数あった／いくつかあった／なかった」の三択としました。結果を図2に示します。自己分析が実施された214科目の約90%において、授業改善に役立っていることが確認できました。

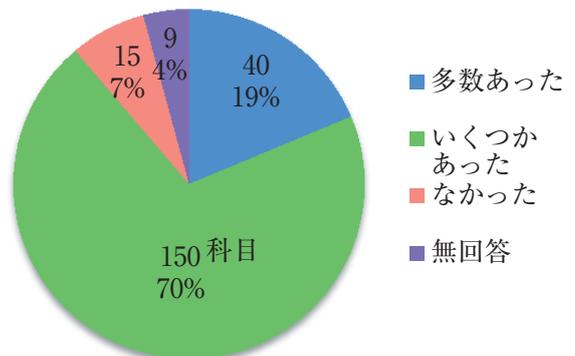


図2 教員からの回答

3 検討課題と展望

webで授業評価アンケートを実施するシステムはFD活動の中で既に定着しており、大きな検討課題はないと考えています。あえて改善項目を挙げるならば（他大学の実施例よりは良い値であるとはいえ）アンケートの回収率約30%をさらに向上することです。この件に関しては大いに期待できることがあります。それは2013年度に予定されているiPadの導入試行です。各授業で学生がiPadを使用できる状況が実現するならば、回収率がアンケート用紙で実施する場合と同様になるものと思われます。

大学間連携SD研修会 参加報告

会計課 中田 圭亮

平成24年9月14日、山形大学小白川キャンパスにて開催されました第4回大学間連携SD研修会に参加致しました。この研修会は、全国49校からなる「FDネットワーク“つばさ”」が相互研鑽の理念の下、参加者一人ひとりが知識や知恵を出し合いそれら交換することにより、自己の新たな可能性を模索し仕事に対する意欲を増進させることを目的として主催しています。

大学間連携SD研修会では、これまでに「あっと驚く事務職員NG集」や「すてきな事務名場面集」といったビデオが撮影されるなど、異なる大学職員同士で大変興味深い内容をテーマに取り上げて開催されてきました。第4回目となる今回は、「大学職員としての広い視野と課題発見能力の育成」をテーマに20年後の未来、特に大学を取り巻く環境の変化を考えることから広い視野と課題発見能力を育成することを目的とされており、全国の大学、短大、高等専門学校などから54名が参加致しました。

研修会は、8班に分けられた参加者の自己紹介から始まり、オリエンテーションでは、山形大学教育開発連携支援センターの小田隆治教授より「予測困難な時代において主体的に考え行動する力を育成するSD」と題してミニレクチャーを受けました。

ミニレクチャーの後は各班に分かれてプログラムI・II・IIIのグループワークを行いました。ただ講義を聞くのではなく、実際に様々な状況に関する考えを出し合うという実践的な研修で、プログラムIでは「自分の職場の見直しと理想とする職場を考える」、プログラムIIでは「20年後の世界・日本・大学・自分はどうなっているか」について各班で意見を出し合い、このプログラムI・IIで話し合った内容を元に、プログラムIIIの「いま我々がしなければならないことは何か」をテーマに20年後の大学をよくするために大学職員として何をしなければならないのかを話し合いました。

その後、3つのプログラムのまとめとして全体発表会が行われ、短時間でどれだけのことを伝えられるか、その方法を考え出す企画力が試されました。パワーポイントを用いた5分間の発表で発表形式の規制は無く、スピーチ、演劇、コント、漫才、ミュージカルなど様々な方法がありましたが、私の班で

は、自分達の考えが小学生にでも理解できるようにわかりやすく発表することに重点を置き、また、できるだけ他に例の無いように、小学校の卒業式などでよく行われる呼びかけ（全員または個人で交互に声を出し合うこと）の方法で発表しました。他の班ではテレビの討論会方式などユーモアのある発表方法もありました。全体発表に向けての班での話し合いや交流会を通して大学間連携SD研修会で強く感じたことは、「他大学職員との交流」こそがこの「大学間連携」と付されたSD研修会の醍醐味であるということです。



研修会場

現在、広く知られるようになって参りましたがSDとは「Staff Development」の略であり、大学職員的能力開発を指しております。これまでも大学職員的能力向上のための研修会等は多く開催され、数多くの事務職員が参加してきた中で、SDに先行して進められているFD（Faculty Development、大学教員的能力開発）に関連して広く注目を集めてきました。これは、大学を取り巻く環境が変化してきたことを受けて教員の意識改革が必要となり、それと同時に教員とともに大学で学生と深いかわりを持つ大学職員がこれまで以上に様々な方法で能力向上・意識改革を図る必要性が出てきたからだと思います。もちろん大学職員として幅広い知識を持つこと、企画力を持つこと、トラブルに対応する能力を持つこと、学生へ積極的にアプローチする力を持つこと、そして大学職員としての責任を持つこと等多くのスキルを高めるための手段としては、個人の自己啓発、組織内のOJTのような、個人単位、大学単位での研修でも可能であると思います。しかし、「大学間連携」として本学以外の大学職員同士で、それぞれの大学で起こった事例（トラブル対応、成功した

対応例等)を体験した職員から直接聞いて意見を出し合うことが更なる広い視野を持ち、本学の新たな可能性を得るきっかけとなるのではないかと感じました。単に経験を話し合うのではなく、お互いにより良い対応策を得ようとする姿勢、他大学の良いところをどんどん吸収しようとする積極的な意識を持ってそういった場に臨むことがSDに必要不可欠となります。

私が初めて参加させて頂いた今回のSD研修会は、今まで参加したどの研修会よりも実践的な内容でした。第1・2回の大学間連携SD研修会で撮影された前述のビデオの上映で次に参加した大学職員が大いに刺激を受けて各大学に持ち帰り、大学内でのSD研修に生かしていく、更なるその経験を研修会で得た他大学職員とのネットワークで多くの大学へ広めていくというような形で、多くの大学職員の能力向上に繋げていくことができるのではないのでしょうか。

大学においては、学生に対して教員、大学職員がさまざまなアプローチをしていきます。より効果的なアプローチを模索してFDやSDの活動が盛んに行

われています。ただ、授業内容の良さであったり、事務処理能力が高いだけではなく、人と人との関わり(学生と教員、学生と職員、教員と職員など)、つまりコミュニケーションが必要不可欠であり、更に大学間での連携・コミュニケーションを盛んにするべきだと思います。本学における大学職員同士の連携はもちろん、意欲的に他大学と連携を図ることで本学内だけでは気付けなかった広い視野を持つようになり、20年後、50年後へ本学の未来を繋いでいくことができるようになると思います。



グループワーク

学生FD活動 —平成24年度のゼミ説明会について—

医療情報学科 教授 上杉 正人

ゼミ説明会が医療情報学科は2012年12月17日に、情報メディア学科が2013年1月11日開催され、毎年恒例の学生FDの行事に成長している。

医療情報学科のゼミ説明会は月曜日の3講時を使って行われた。この時間は医療情報演習の時間で、各教員がゼミを紹介する。全教員のゼミの紹介が終わった段階で、ゼミ説明会を開催して学生からゼミを紹介するという企画である。さらに4講時、5講時は医療情報学科のゼミIIIと卒論の時間であり、希望学生に実際にゼミを聴講することも企画に入れた。今回は説明だけではなく、ゼミの雰囲気も体感する企画も加えた。

ゼミ説明会に参加した学生は2年生68名中61名(89.7%)であった。11のゼミの先輩(3年生)が1回15分の説明を4回実施し、2年生が興味あるゼミを自由に聴いて回る従来と同じ方式である。例年は1ゼミ1教室を使って説明会を行ったが、今回は3つの大教室に複数のゼミが合同で行う方式をとった。

これによりどこのゼミにどれだけの学生が集中しているのかが一目瞭然となった。また、15分の説明後の移動も速やかにでき効率的にできたと思われる。

ゼミ説明会後に行ったアンケート調査(回収率90.2%)では、以前から興味があったゼミがのべ114あったのが、ゼミの説明をのべ150回受けて、84のゼミに絞られた(表1)。つまり参加した61名の学生は平均1.86のゼミに興味を持っていたが、平均2.45回のゼミ説明を受けて、最終的に1.37のゼミに絞ったことになる。学生にとっていろいろと迷うゼミ選択

表1 ゼミ説明会前後でゼミに対する関心がどのように変化したのか

	以前から 興味があった	今回、 説明を受けた	現在、 興味がある	差分
A	5	11	5	0
B	18	28	11	-7
C	22	26	13	-9
D	8	14	5	-3
E	10	9	5	-5
F	29	29	17	-12
G	4	6	5	1
H	8	11	13	5
I	4	1	3	-1
J	4	15	7	3
K	2			-2
合計	114	150	84	

がこのゼミ説明会を通して集約していく状況が理解できる。特に人気のゼミに関しては大きく変化している。これはゼミに入れる条件が成績による場合、ゼミの人気度と自分の成績のバランスを考えながら自分に合ったゼミを検討しているものと考えられる。

さらに、このゼミ説明会において52名（94.5%）の学生が“ほしい情報が得られた”と答えており、また同様に94.5%の学生がゼミ決定に役に立つと答えている。ゼミ説明会の有用性が示されている。しかし、来年度もゼミ説明会は必要か？の問いに対して36名（65.5%）の学生がいいえと答えている。来年は自分たちが企画運営することに対して抵抗があるのだろうか。少し残念である。

表2 ゼミ説明会の評価

	Yes	No
ゼミ説明会に参加して、欲しい情報を得られたか	52	1
運営は十分に行っていたか	51	2
今回のゼミ説明会はゼミ決定の際に役立つか	52	1

今回、ゼミ説明会の終了後に学生が関心のあるゼミIIIに参加したと聞いている。今回、ゼミ説明会自体を講義時間帯に組み入れたこと、引き続きゼミを体感できる場を設けることができたことの意義は大きいと感じる。

情報メディア学科は金曜日の2講時と6講時を使ってゼミ説明会を実施した。例年、各ゼミがブース展示にてゼミ内容の紹介を行っていた。今回は2講時にプレゼンテーションを行い、6講時にブース展示を行う方式をとった。このようにしたのはいろいろなゼミの活動内容を知りたいという学生のニーズがもたれている。限られた時間の中では関心のあるゼミをすべて知ることが難しいので、例年のブース展示に加えてプレゼン方式も加えることになった。参加ゼミは16であった。そのうちプレゼン方式が5、ブース展示方式は11であった。このゼミ説明会への参加した2年生は約30名であった。

もっと多くの学生の参加を考えていたが30名程度の学生に留まった。ポータルサイトのニュースや学内メールを用いて全学生に告知したが、結果として集まった学生は少なかった。この理由にはゼミ決定の時期がかかわっているように思われる。医療情報学科の場合、1月中にゼミの仮決定を行い3学年への進級決定と同時に確定するので、12月のゼミ説明会はゼミ決定の重要なイベントであるが、情報メディア学科の場合はゼミ決定まで少し時間が空くため、



ゼミのプレゼンテーション



プレゼンテーションに聞き入る学生



ゼミについて説明する先輩



ゼミを紹介する学生

参加学生のモチベーションが上がらなかったのではないだろうか。

まだまだ課題もあるが毎年のゼミ説明会も定着し一定の成果を上げていると考える。今後の学生の持続的な取り組みと革新的企画に期待したい。そしてゼミ説明会の取り組みの準備に指導していただいた先生方には、この場を借りて感謝申し上げます。

FD活動 行事实績（平成24年度後期）

日 程	行 事
11月6日(火) ～11月9日(金)	国際会議 EDUCAUSE 2012 参加 米国 コロラド州 デンバー
11月29日(木)	2012年度第2回新任教員研修会
12月17日(月)	学生FD 医療情報学科の合同ゼミ説明会
12月25日(火)	大学ICT 推進協議会2012年年次大会参加
1月7日(月) ～1月31日(木)	平成24年度 後期授業評価アンケートの実施
1月11日(金)	学生FD 情報メディア学科の合同ゼミ説明会
2月8日(金)	入学前教育「仲間作り」
2月26日(火)	入学前教育「基礎学力補充 学習指導」
3月1日(金)	2012年度北海道情報大学FDフォーラム
3月7日(金)	入学前教育「基礎学力補充 学習指導」

FD委員会WGの活動実績（平成24年度後期）

WG名	月例ミーティング等
全学教務・FD委員会	10/26(金)、11/28(水)、12/26(水)、1/23(水)、 2/20(水)、3/27(水)
WG 1（学生による授業評価アンケート）	10/17(水)、2/20(水)
WG 2（ピアレビュー制度の導入）	12/18(火)
WG 5（イベント・教育活動支援情報の企画）	11/15(木)
WG 8（カリキュラムディベロップメント）	10/24(水)、11/20(火)、12/11(火)
WG 9（Own Teacher制度の導入）	2/12(水)
学生FDとの連絡会議	10/25(木)、11/22(木)、12/20(木)、1/31(木)
スタートアッププログラム小委員会	2/26(火)
iPad（タブレットPC）導入検討WG	3/5(火)
シリアスゲーム教材開発WG	10/24(月)、11/21(水)、12/17(月)、1/21(月)、 2/22(金)、3/22(金)
将来履修モデルの検討WG	10/23(火)、11/19(月)、12/18(火)、1/21(月)、 2/8(金)、3/25(月)
プログラミング教育WG	10/15(月)、11/21(水)、12/20(木)、1/22(火)、 2/19(火)、3/19(火)

編集後記

「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」が20年度教育GPに採択されて、5年がたつ。実質的には、21年の春から25年3月までの4年である。その間に上げた成果は、ワーキンググループのフォーラム報告集のとおりであるが、教職員の直接的な参加の数は、教職員150名のうち約74名に及ぶ。半数がFDに参加していることになる。教員の参加比率を取れば、8割を超える。参加人数が多いことが情報大学のFDの特色であり、成功の要因のひとつであろう。

先端経営学科 教授 長井 敏行